

[D年] 聖霊降臨節第17主日(2024年9月8日)**【旧約聖書日課】 エレミヤ書 50章4～7節**

- 4 その日、その時には、と主は言われる。
イスラエルの人々が来る
ユダの人々も共に。彼らは泣きながら来て
彼らの神、主を尋ね求める。
- 5 彼らはシオンへの道を尋ね
顔をそちらに向けて言う。
「さあ、行こう」と。
彼らは主に結びつき
永遠の契約が忘れられることはない。
- 6 わが民は迷える羊の群れ。
羊飼いたちが彼らを迷わせ
山の中を歩き巡らせた。
彼らは山から丘へと歩き回り
自分の憩う場所を忘れた。
- 7 彼らを見つける者は、彼らを食らった。
敵は言った。
「我々に罪はない。
彼らが、まことの牧場である主に
先祖の希望であった主に罪を犯したからだ」
と。

【使徒書日課】 ペトロの手紙一 2章11～25節

11愛する人たち、あなたがたに勧めます。いわば旅人であり、仮住まいの身なので、魂に戦いを挑む肉の欲を避けなさい。12また、異教徒の間で立派に生活しなさい。そうすれば、彼らはあなたがたを悪人呼ばわりしてはいても、あなたがたの立派な行いをよく見て、訪れの日には神をあがめるようになります。13主のために、すべて人間の立てた制度に従いなさい。それが、統治者としての皇帝であろうと、14あるいは、悪を行う者を処罰し、善を行う者をほめるために、皇帝が派遣した総督であろうと、服従しなさい。15善を行って、愚かな者たちの無知な発言を封じることが、神の御心だからです。16自由な人として生活しなさい。しかし、その自由を、悪事を覆い隠す手だてとせず、神の僕として行動しなさい。17すべての人を敬い、兄弟を愛し、神を畏れ、皇帝を敬いなさい。

18召し使いたち、心からおそれ敬って主人に従いなさい。善良で寛大な主人にだけでなく、無慈悲な主人にもそうしなさい。19不当な苦しみを受けることになっても、神がそうお望みだとわきまえて苦痛を耐えるなら、それは御心に適うことなのです。20罪を犯して打ちたたかれ、それを耐え忍んでも、何の誉れになるでしょう。しかし、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、これこそ神の御心に適うことです。21あなたがたが召されたのはこのためです。というのは、キリストもあなたがたのために苦しみを受け、その足跡に続くようにと、模範を残されたからです。22「この方は、罪を犯したことがなく、その口には偽りがなかった。」23ののしられてもののしり返さず、苦しめられても人を脅さず、正しくお裁きになる方にお任せになりました。24そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました。25あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は、魂の牧者であり、監督者である方のところへ戻って来たのです。

【福音書日課】 ヨハネによる福音書 10章1～6節

1「はっきり言うておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。2門から入る者が羊飼いである。3門番は羊飼いには門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。4自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているの、ついて行く。5しかし、ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。ほかの者たちの声を知らないからである。」6イエスは、このたとえをファリサイ派の人々に話されたが、彼らはその話が何のことか分からなかった。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

エレミヤ書50章4～7節

- 4 その日、その時には
イスラエルの子らが来る
彼らもユダの子らも共に——主の仰せ。
彼らは泣きながらひたすら歩き
彼らの神、主を尋ね求める。
- 5 彼らはシオンを訪ね
顔をその方向に向けて言う。
「さあ、行こう。
主に連なろう。
永遠の契約が忘れられることはない」と。
- 6 わが民は迷える羊の群れであった。
牧者が彼らをさまよわせ
山々を歩き巡らせた。
彼らは山から丘へと歩き回り
自分の憩う場所を忘れた。
- 7 彼らを見つける者は皆、彼らを食らった。
敵は言った。
「我々に罪はない。
彼らが、義の牧場である主に
先祖の希望であった主に
罪を犯したからだ。」

ペトロの手紙一2章11～25節

¹¹愛する人たち、あなたがたに勧めます。あなたがたはこの世では寄留者であり、滞在者なので、魂に戦いを挑む肉の欲を避けなさい。¹²また、異教徒の間で立派に振る舞いなさい。そうすれば、彼らはあなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたの立派な行いをよく見て、訪れの日に神を崇めるようになります。

¹³すべて人間の立てた制度に、主のゆえに服従しなさい。それが、統治者としての王であろうと、¹⁴あるいは、悪を行う者を罰し、善を行う者を褒めるために、王が派遣した総督であろうと、服従しなさい。¹⁵善を行って、愚かな人々の無知な発言を封じることが、神の御心だからです。¹⁶自由人として行動しなさい。しかし、その自由を、悪を行う口実とせず、神の僕として行動しなさい。¹⁷すべての人

を敬い、きょうだいを愛し、神を畏れ、王を敬いなさい。

¹⁸召し使いたち、心から畏れ敬って主人に従いなさい。善良で寛大な主人にだけでなく、気難しい主人にも従いなさい。¹⁹不当な苦しみを受けても、神のことを思って苦痛を耐えるなら、それは御心に適うことなのです。²⁰罪を犯して打ち叩かれ、それを耐え忍んでも、何の誉れになるでしょうか。しかし、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、これこそ神の御心に適うことです。²¹あなたがたは、このために召されたのです。キリストもあなたがたのために苦しみを受け、その足跡に続くようにと、模範を残されたからです。

²²「この方は、罪を犯さず、その口には偽りがなかった。」

²³罵られても罵り返さず、苦しめられても脅すことをせず、正しく裁かれる方に委ねておられました。²⁴そして自ら、私たちの罪を十字架の上で、その身に負ってくださいました。私たちが、罪に死んで、義に生きるためです。この方の打ち傷によって、あなたがたは癒されたのです。²⁵あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は、魂の牧者であり監督者である方のもとへ立ち帰ったのです。

ヨハネによる福音書10章1～6節

¹「よくよく言うておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。²門から入る者が羊飼いである。³門番は羊飼いには門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。⁴自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているの、付いて行く。⁵しかし、ほかの者には決して付いて行かず、逃げ去る。その人の声を知らないからである。」⁶イエスは、このたとえをファリサイ派の人々に話されたが、彼らはその話が何のことか分からなかった。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・9月8日「聖霊降臨節第17主日」の日課主題は「上に立つ人々」。

・旧約聖書日課は、「エレミヤ書」から、バビロンに向けた預言としてまとめられた箇所の一部。使徒書日課は、「ペトロの手紙一」から、信仰者に神の僕として生きる姿勢を説く箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、主イエスがファリサイ派に向けて「羊の門」のたとえを語る箇所。

旧約日課(エレミヤ 50 章より)

・「エレミヤ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第二巻とされた預言文書。著者や時代背景については、前回資料「聖書と祈りの会 240828」を参照。本書中、46～51章は諸民族に対する預言がまとめられており、45章までと明確に区別される。その預言の対象は、エジプト(46章)、ペリシテ人(47章)、モアブ(48章)、アンモンの人々、エドム、ダマスコ、ケダル、エラム(49章)と続き、バビロン(50～51章)に至る。日課箇所は、この最後のバビロンに向けた預言の一部に当たる。

・これらの諸民族に対する預言集のうち、49章までの内容は、判断が分かれるものもあるが預言者エレミヤの時代(ヨシヤ王からゼデキヤ王の時代まで)を背景として解釈しうる余地を残しているのに対して、50～51章の内容は、明らかにエレミヤ以後の時代、具体的にはネブカドネツアル王没後のバビロニア帝国末期からキュロスのペルシア帝国へと移行していく時代を背景とした用語表現となっている。「エレミヤ書」冒頭の標題によると、預言者エレミヤの活動時期は「ヨシヤ王の時代、その治世の第十三年」から「ゼデキヤの治世の第十一年の終わり、すなわち、その年の五月に、エルサレムの住民が捕囚となるまで」であり、前628年～587年頃と同定される一方、バビロニア王ネブカドネツアルの在位は前605年～562年頃とほぼ確定されている。また、45章までで展開されているエレミヤの預言は、ユダ・エルサレムの人々(王族、貴族ら)に対してバビロニア・ネブカドネツアル王を「神の僕」と位置づけて彼の国への従属を呼びかけるものであるのに対して、50～51章は一転して、バビロンを神に滅ぼされるべき都として糾弾し、ネブカドネツアル(≡ネブカドネツアル)をつ暴虐な悪王として描写している。預言者エレミヤは、ヨシヤ王の時代に親バビロニア派を形成した中心人物の一人と考えられ、一貫して親バビロニアの立場で預言を語っていたと考えられるので、多くの学者は50～51章をエレミヤの後継者の手による加筆とみなしている。もちろん、エレミヤが長寿を享受し、晩年に立場を変えて告げた預言である可能性が否定されるわけではない。そうだとした場合、このような反バビロニアの預言が「エレミヤ書」の一部を構成するに至った理由は丁寧な考察が必要。

・エレミヤが親バビロニアの立場を取り、「エレミヤ書」にその預言が記録として残されていた多くの時代は、ネブカドネツアル王の時代である。ネブカドネツアル王は、父王ナボポラッサルの治世末期から後継者として頭角を現し、王位についてからは、バビロン市の整備造営に精力を注ぎ、マルドゥク神を頂点とするバビロンの伝統的な神殿体制を称揚保護することに熱心であった一方、地方聖所神殿については放任していたとされる。エレミヤらが肯定的に見ていたバビロンおよびネブカドネツアル王とは、このような帝国であった。ところが、ネブカドネツアル没後、しばらくの王位継承の混乱を経てバビロニア王国最後の王となったナボニドス王(在位=前555～539年頃)は、地方聖所神殿を積極的に保護するとともに王権管理下に置くために地方の諸神像をバビロン市域に移設させる一方で、本人は在位中の10年をバビロン市から離れて統治を皇太子に委ねるようなことをし、結局、最終的にペルシア王キュロスの侵攻にバビロンを無血開城するに至った。このようなバビロニア王国末期の状況は、エレミヤ本人であろうと、その後継者であろうと、バビロンやその王権の墮落と映った可能性は大いにありうる。そして、かつての墮落したアッシリアに代わって現れたバビロニア王国のように、今新たにバビロニアに代わって現れようとしていたのが、キュロス王率いる「メディアとペルシア」であると受け止められたと考えられるのである。

使徒書日課(Ⅰペトロ 2章)

・「ペトロの手紙一」は、「手紙二」と共に使徒ペトロが諸教会に宛てた書簡として新約正典に収められた文書。現代の批判的学者は、本書を「ペトロ」に帰されない文書とみなすが、伝統的に「ペトロ」に帰されて教会で読まれてきた。ただし、「手紙二」は、古代教会において長年その著者性に疑義が呈され続け、広く正典として受け入れられたのは4世紀以降である。

・本書「手紙一」は、その標題で「ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアの各地」、つまりシリア・アンティオキア以西、エーゲ海に接するまでのアナトリア半島に広く点在する信者に宛てたものであることが明示されている。教会伝承によると、ペトロは、ローマおよびアンティオキアを管轄する指導者と位置づけられる一方、その中間に位置するアジア州エフェソを管轄指導したのは使徒ヨハネであったとされる。ただし、使徒ヨハネがエフェソに拠点を置くようになるまでには曲折があったと伝えられており、この地域への指導を巡って、ペトロ派とヨハネ派の間で葛藤があった可能性はある。本書は、ペトロ派がこの地域の指導管轄権を主張する意図で広布されていたのかもしれない。なお、本書簡は、末尾で実際の執筆者が「シルワノ」であることを明記している(5:12)。シルワノは、パウロの協力者として名が挙げられる人物で(Ⅱコリ 1:19、Ⅰテサ 1:1、Ⅱテサ 1:1)、ペトロとパウロの協力関係を推認する上で見落とせない人物である。

・日課箇所は、異教徒社会の中にあつて信者が如何なる姿勢で生きるべきかを教えている。皇帝をはじめとする統治者に対する従順な態度を勧めるのは、パウロの場合と同様である(ロマ 13 章など)。彼ら初期教会の使徒らには、支配体制への批判はもとより強圧的な統治への抵抗などを推し進める考えがなく、むしろ、そのような者たちも含めたすべての者に対する敬意ある姿勢を旨とすべきという立場が徹底されている。近現代の教会の中には、このような使徒らの態度方針を時代の制約を脱していない旧態然としたものとして批判し、教えそのものも無視する立場を取る者たちがある。その際に、主イエスは支配体制への批判をし、強圧的な政治に抵抗された、という主張が合わせてなされることもあるが、福音書にそのような主イエスの態度が明示されているとは言えない。概して主イエスの態度は、議論はしても抵抗はせず、批判はしても扇動はせず、というものであり、使徒たちの態度方針の源泉が主イエスにあるという原則は変わらない。

福音書日課(ヨハネ 10 章より)

・日課箇所は、主イエスの羊にまつわたとえを用いた一連の教え(10:1~18)の最初の部分。本福音書中、「仮庵祭」の枠組み(7 章~10:21)の中に置かれた最後の部分で、「生まれつきの盲人のいやし」(9 章)を端緒として展開したファリサイ派の人々との議論の結部に位置づけられる(6 節)。

・1 節「はっきり言っておく」の原文は、「アメン・アメン・レギー・ヒュミン」で、これ自体が独立した慣用句を構成して、注意喚起を呼びかけている。他方、後段 7 節に出てくる同じ訳文の原文は、後に「ホティ」節が続き、構文上の中心は「ホティ」節で示す事柄に置かれている。

・1 節「囲い(アウレー)」は、後段 16 節で再び取り上げられ、信者の共同体の枠組みを示唆する用い方がされているほか、18:15 では「屋敷」の訳語で用いられている。

・1 節「門(テュラ)」は、後段までに 4 度繰り返し用いられて(1,2,7,9 節)、このくだりの鍵語となっているほか、受難・復活伝承の中でも「門」(18:16)、「戸」(20:19,26)の訳語で現れる。

・「羊(プロバトン)」は、1 節から後段 27 節までに 15 回集中的に用例が見られるほかは、2 章の「神殿から商人を追い出す逸話」の 2 例と、21 章のペトロとの対話の中での 2 例(21:16,17)のみである。教えの内容から、日課箇所を含む 10 章と 21 章のペトロとの対話は同じ視点で語られる「羊と羊飼いのたとえ」であることが明白であり、2 章の用例も含めて、一連の用例が「ヨハネ」の教会共同体観を示すものになっていると見られることもできる。

・2 節「羊飼(ポイメーン)」は、16 節までに集中して 6 例ある一方、本福音書に他の用例はない。

・3 節「門番(テュローポス)」は 18:16,17 にも用例。

来週の誕生日 (9 月 8 日~14 日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-2「聖なるみ神は」(= I 18)は、17 世紀ドイツ最大の讃美歌作曲家 J. クリューガーが作曲した曲に合わせて、20 世紀日本の礼拝学・讃美歌界をリードした由木康が自ら編纂に携わった 1931 年版『讃美歌』のために新たに作詞した讃美歌。
- ・21-120「主はわがかいぬし」(= II 41)は、詩編 23 編のスコットランド詩編歌で、ウィリアム・ウィッテンガムの原歌詞をピューリタンの讃美歌作家フランシス・ローズが補筆。曲は、19 世紀の詩編歌集で公にされ、1947 年の英女王結婚式で歌われ広まった。
- ・21-543「キリストの前に」(歌詞 = I 537「わが主のみまえに」)は、1881 年版『讃美歌』編纂に際して奥野昌綱が作詞、当初は「しずけき祈りの」(21-495 番)の曲、1903 年版『讃美歌』からは「わが主のみまえに」(I-537 番)の曲で歌われてきたものだが、『讃美歌 21』編纂に際して大幅に改作した歌詞に高浪晋一が新しい曲をつけた。
- ・21-91「神の恵みゆたかに受け」は、20 世紀米国の音楽家 O. ウェステンドルフが作詞し、ウェールズ民謡曲と組み合わせて発表された。

21-120「主はわがかいぬし」

The Lord's my shepherd, I'll not want

1. The Lord's my Shepherd, I'll not want; / He makes me down to lie / In pastures green; He leadeth me / The quiet waters by.
2. My soul He doth restore again, / And me to walk doth make / Within the paths of righteousness, / E'en for His own name's sake.
3. Yea, though I walk in death's dark vale, / Yet will I fear no ill; / For Thou art with me, and Thy rod / And staff me comfort still.
4. My table Thou hast furnished / In presence of my foes; / My head Thou dost with oil anoint, / And my cup overflows.
5. Goodness and mercy all my life / Shall surely follow me, / And in God's house forevermore / My dwelling-place shall be.

21-91「神の恵みゆたかに受け」

Sent forth by God's blessing

1. Sent forth by God's blessing, our true faith confessing, the people of God from this dwelling take leave. The supper is ended. Oh, now be extended the fruits of this service in all who believe. The seed of Christ's teaching, receptive souls reaching, shall blossom in action for God and for all. Your grace shall incite us, your love shall unite us to work for your kingdom and answer your call.
2. With praise and thanksgiving to God ever-living, the tasks of our ev'ryday life we will face--our faith ever sharing, in love ever caring, embracing God's children, the whole human race. With your feast you feed us, with your light now lead us; unite us as one in this life that we share. Then may all the living with praise and thanksgiving give honor to Christ and his name that we bear.